

それは、1991年9月23日のことである。2年前に銅とコバルトの日本への安定供給を求め、アフリカのザイール国キンシャサ市に家族共々赴任。発展途上国ではあるが、資源豊富で活気に満ちた国であつた。世界の流れとしては、ベルリンの壁が崩壊し、独裁政権が終わりを告げる予兆はあつたものの、自分の赴任地でクーデターが起ころうとは予想しなかつた。

当日朝、車で出勤する途中、大勢の兵隊が銃を構え、引き返し、鉄製の扉を閉め、鍵を掛けて引き籠もつた。がて、政府軍と反政府軍

の銃撃戦が始まった。隣のベルギー人の家が襲われ銃砲の音と共に悲鳴もあがつた。

状況から判断して、次は自宅が狙われる考え方、家族をベッドの下に避難させ、一人庭先で銃を構えた。隣

が静かになつた(後で分かったことだが、全員虐殺であつた)。次に、自宅の扉を乗

り越えようとした黒い手が複数目に入つた。覚悟を決

め、引き金を引く寸前、銃弾飛び交つ中、日本大使館の武官に車で救出された。

日本に帰国後、この出来事を作家の深田祐介が『高麗奔流』(文春文庫)にまと

めました。

心の選択肢として千年も前から巡礼が行われている

直すとともに、一生のうち一度はと思い、全国20数

カ所ある巡礼箇所の中から

居住地に近い西国33カ所を選んで、月に2カ所を目標

に家内と一緒に巡ることに

しました。

まずは巡礼の心得や参拝方法を勉強し、掛軸も集印

と御詠歌用を用意するなど

巡礼用具を整え、先頃世界遺産として認められた熊野古道の一角、第一番札所の那智青岸渡寺を皮切りに番

外を含める39カ所を本来なら歩いて巡るべきです

しかし片道5、6キロもあり随所に厳しい箇所があるなど決して楽なものではありませんでした。

こんな巡礼の旅でした

が、道には美しい自然が生きており、道行く中で行き交う人との人情にふれて心がやすらぎ、せまい日常の雑念を忘れ、巡り終えた達成感とともにこれから広い世界を見ることができました。

常に話の最後にサンキューとつける事です。日本人はなかなか「ありがとうございます」という言葉が出てこない事に気付きました。まず自分から直し、実践しようと考へました。物語ってもらつた時の「ありがとうございます」は自然に言葉が出てこない事に気付きました。「ありがとうございます」と考へました。

米国人に一番学んだ事は常に話の最後にサンキューとつける事です。日本人はなかなか「ありがとうございます」という言葉が出てこない事に気付きました。

米国のブッシュ大統領はス

ピーチの後に必ずサンキュー

と言いますが、日本の総理大臣にはありません。日々

常に話の最後にサンキューとつける事です。日本人はなかなか「ありがとうございます」という言葉が出てこない事に気付きました。

米国のブッシュ大統領はス

ピーチの後に必ずサンキュー

と言いますが、日本の総理大臣にはありません。日々